

A Study on the History of Rugby Football (IV) : Football by an Old Rugbeian

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23348

ラグビーの歴史について(4)

——Old Rugbeianによるフットボール——

秦 修 司

A Study on the History of Rugby Football (IV)

——Football by an Old Rugbeian——

Shuji HATA

緒言

Rugby Schoolにおけるフットボールは、1850～1860年代にその学校において採られた特定の様式で完璧なフットボールの状態に近づいていた。このフットボールが素晴らしいゲームであることは、そのゲームがBig Schoolのフットボールの熱狂者によってイングランドの様々な地域に植付けられ、伝播していったことから明らかである。Big Schoolとは Grammer Schoolを意味しており、他のほとんどすべての学校がRugby Schoolのフットボールを畏怖で見ていた。

E.F.T. Bennetは、彼自身、Old Rugbeianであり、1860年代に実際にRugby Schoolにおいてフットボールを行っているが、1898年に発行されたThe Badminton Magazine, vol. 7 (July to Dec.)の274頁～286頁に「FOOTBALL BY AN OLD RUGBEIAN」の表題で寄稿している。その内容は1860年代、Rugby Schoolで行われていたフットボールやその状況について詳細に記述したものである。そこで本研究ではE.F.T. BennetのFOOTBALL BY AN OLD RUGBEIANに基づき、1860年代、Rugby Schoolにおいてどのようにフットボールが行われていたか、そしてその状況について考究した。

本論

1860年代、少年がBig Schoolに入学することは、実際問題として新しい生活を体験すること

であった。少年はあらゆる場所で強打される覚悟がなければならなかった。いまだに拳闘が行われていたが、しかし活動的でgame-playingの生活様式は荒っぽさを通常のこととしたが、極めて健康的であったので、Big Schoolの教師たちは暗黙の合意により少年たちによる自治を認めていた。

フットボールは、ゲームの中でも、そのような自治的な少年たちに最適のものであった。何故ならば、フットボールはアイパイアなしに、プレーヤー相互の譲歩の精神で行われ、それにより公正さが奨励されたからである。Rugby Schoolを起源とするフットボールから継承した15人制のゲームは、たいていの人々によって昔のゲームよりはるかに科学的であらゆる意味においてよりベターであると考えられた。しかし現在のフットボールの起源となるゲームは、それがRugby Schoolの少年たちに及ぼした影響やOld Rugbeianになってからもそのゲームを続けたいという願望からすれば、当然、偉大なゲームであるとするのもっともである。

1860年代のRugby Schoolのフットボールにおいて、相手の脛を蹴ること、つまりhackingはしばしば過度なまでになされたが、hackingの本来の意味は1850～1860年代に是認されていた慣習による規則の誤用に対しての罰則であった。相手がゴールに向かってボールを持って走るとは1841～42年に合法になったが、それ以前はボールを持って走る行為はhackingによ

て厳しく罰するに値すると看做されており、従って hacking over は Rugby School のフットボールの古い形態が大きく変化するまで継続された技であった。ボールを持って走ることが合法になる以前には、規則ではプレーヤーがボールを拾いあげたら、キックする前に後方に下がらなければならない、相手側はキックするプレーヤーのマークまで上がっていったよかった。

ドロップ・キックは、ある状況のもとで、ボールを下に投げ、そしてできるだけすみやかにボールを蹴ることを不可避にした規則が発展していったものである。Rugby School のフットボールに極めて独特のものであるボールを持って走ること、そしてボールをドロップすることがゲームの基礎であった。1846年に最初の規則が公にされ¹⁾、そしてその規則の中に現在行われているゲームの歴史を垣間見ることができる。

実際的な方法で脛を蹴ること、つまり hacking を中止させる最初の公の試みは、協調されたプレーによって hacking の必要のないことを例証したある寄宿舎のチームのよってなされたが、この寄宿舎は hacking を頻繁に行うチームより多くの勝利をあげたのである。

極めて興奮したフットボール熱狂者が観戦している20人制での House Match は、規則に準じた3ゴールのうち2ゴールがなされるまでゲームの勝敗が決まらなかったが、当時はゴールだけしか得点に計算されず、従って House Match が何日も続くことは稀なことではなかった。

年度の3つの主要な試合において彼等が Old Rugbeian であろうとゲストであろうとも、following cap を持っておれば、誰でもがゲームに参加することが許されたが、彼等の house (寄宿舎) の twenty となり、2つの Cock House のチームで戦った。The Sixth vs School の試合によりフットボールのシーズンが開始した。次に The Old Rugbeian vs School の試合があり、最後に The Cock House vs School の試合でシーズンが終了した。The Sixth Match は初秋に行われたが、School は全員白のジャージーを着用し、Sixth は縞模様の

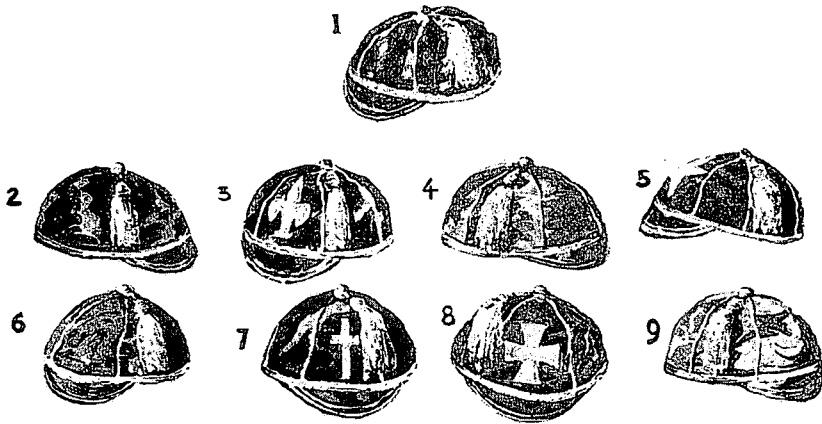
ジャージー、明るいベルベットのキャップ、そして白のズボンを着用した。

校庭の略図から、Rugby School で行われていたフットボールのゲームの状況が把握される。グラウンドの中に、適度に離れて立っていた3本の木は、ほぼ中央に位置すると見られていたが、実際には木は Island のゴールより約10ヤード School のゴールに接近していた。これら3本の木は Rugby School におけるフットボールのゲームに大きな役割を果たした。これらの木はフットボールのゲームの激しい戦いの場であり、劣勢にあるチームはこれら木の助けによって、一息つくか又はより長時間味方ゴールからボールを遠ざけておくことができた。フィールド・オブ・プレーにあるアッシュの木も又、ボールが地面に落ちるまでに、プレーヤーがボールの下に達せれるようにするのにしばしば役に立った。

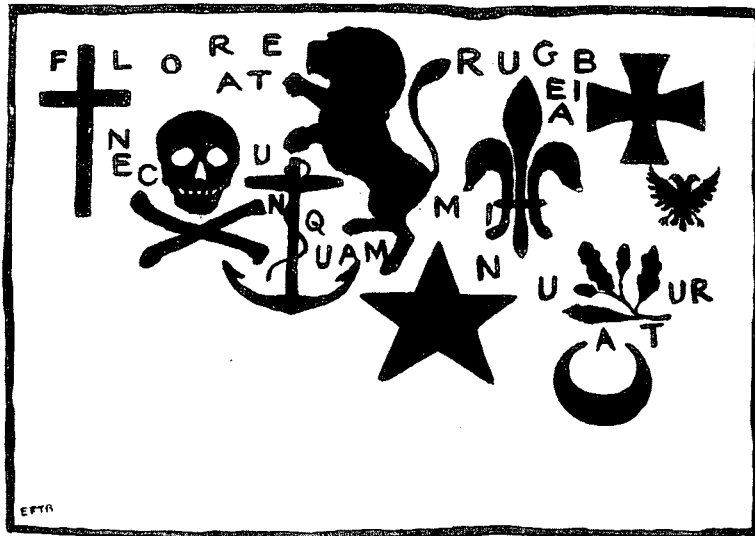
タッチは、木の並びのラインで規定されており、グラウンドの Pontine's の側では、タッチはそのラインの延長だけであった。グラウンドの広大さのため、各々のチームは人数を多くして試合をすることができた。Bennet は当時の The Sixth vs School の試合の状況について、次のように記述している。

ボールはグラウンドの中央に置かれ、両サイドは互いに面と向かいあう。多分にプレーヤーが150人いたので、その光景は感銘を与えるものである。用意はいいか？と Sixth のキャプテンが叫ぶ。いいぞ！との返事があり、大声の喝采とともに、あざやかに蹴られたボールは School のゴールに向かってとんでいく。

100人以上ものプレーヤーの重たい足音は傍観している群衆にとって刺激的であり、そして彼等の関心は、彼等がとどまりたいと願う限りなくなる。というのは、そのゲームは狩猟、ポロ、そして他の2、3のものが持っている何か言い表せないもので一杯であったからである。School のバックがボールを送ると、その下で、最初のスクラメージ(スクリメージではない)が形成される3本



EFTB



VELVET FOLLOWING-UP CAPS

1. Town : purple and gold
2. School House : crimson and gold
3. Burrows' : maroon and silver with fleur de lys
4. Blake's : light blue and silver
5. Mayor's : dark blue and silver with star
6. Smythies' : green and gold
7. Bowden Smith's : black and silver with Latin cross
8. Evans' : orange and silver with Maltese cross
9. Arnold's : cherry and silver with crescent

BADGES ON CLOSE-FITTING THIN COTTON JERSEYS

1. Lion rampant : purple striped or white jersey
2. Skull and cross bones : red striped or white jersey
3. Fleur de lys : brown striped or white jersey
4. Anchor : blue striped or white jersey
5. Five-point star : dark blue striped or white jersey
6. Oak leaf : green striped or white jersey
7. Latin cross : black and blue striped or white jersey
8. Two-headed eagle : orange striped or white jersey
9. Crescent : cherry striped or white jersey

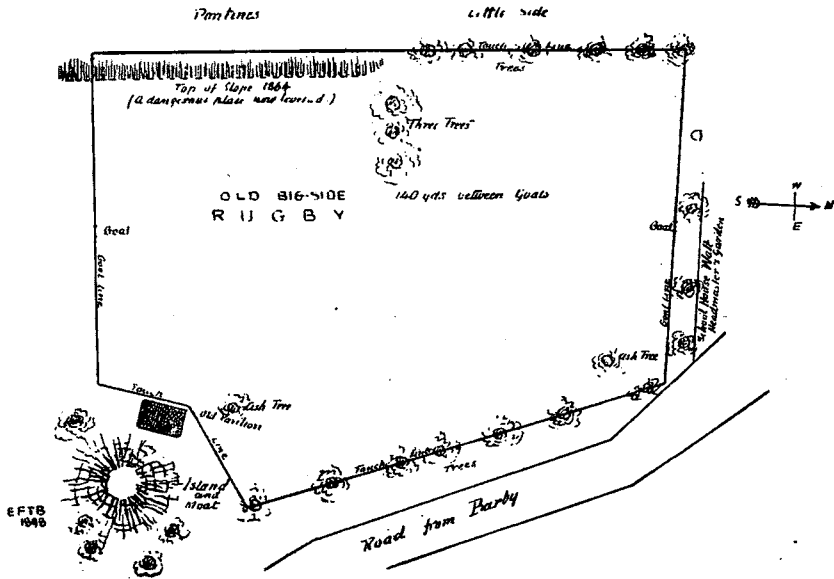


図2 A Plan of the Close at Rugby School (The Badminton Magazine. FOOTBALL BY AN OLD RUGBEIAN より)

の木にとんでいく。ボールは枝から枝へと落ちていき、最終的には枝にとどまり、ボールをおろせ！の叫び声で闘争が本式に始まる。

大きなスクラメージは、ここかしこに揺れ動き、遂には広がってしまい、プレーヤーはボールに突進していくことができる。30名のものが、ボールをSchoolのゴールに押し進めようとしているが、突進している途中にボールを力づくで戻そうとする40名の白のジャージーに遭遇する。機敏なハーフ・バックはボールをつかみとって、困惑し興奮している群衆の中を抜けていく。彼は手際よいキックで、猛然と前進するまでは遠くへ進めず、そして次のスクラメージが形成される。再びボールは自由になり、最初は地面からのキックによって、そして次にドロップ・キックによってあちこちに運ばれる。再びボールはひっつかまれ、そこで実用的なかくれんぼのできる3本の木の後方に運ばれる。

フィールドにはプレーヤーが散らばっている。というのはペースが極めて速いものであり、どんな中心から離れた者でも、どんな瞬

間にも主役となることができるからである。

Schoolは突進して集まり、新たにスクラメージが形成されるが、Sixthも又、そうする。ボールはIslandのゴールの方にも出るが、即座にSixthのハーフ・バックが3本の木の下からSchoolのゴールめがけてドロップ・キックをするが、ゴール・ポストの外1ヤードはずれて得点をのがす。いいドロップキックだ！との叫びがあり、その時Schoolのバックが充分危険性のない状態にあるゴール・キーパーたちの群れに紛れてライン後方に沿ってボールを運び、タッチ付近でダッシュし、長距離のドロップ・キックで、再度事態を互角にする。そして激闘は続行されるが、唯一の休息時間は一方又はもう一方のチームがタッチ・ダウンして、現在では25ヤードと称されるquarter way postで再びキック・オフせざるを得ない時のみである。そのようなゲームの2時間かそれ以上がフットボールの熱狂者にとって充分であり、終りに向けて、Sixthは、School、助けに来い！押し出せSchool！と叫びながら、突進してスクラメー



SCHOOL TO THE RESCUE !

図3 (The Badminton Magazine. FOOTBALL BY AN OLD RUGBEIAN より)

ジに入っていく100名又はそれ以上のゴール・キーパーの擁護者への援助によって School のゴールから押しのけられるだけである。²⁾

そのような試合において、身体の小さな少年の多くは興奮した身体の大きなプレーヤーたちの前で要求される勇気を持ってボールをタッチ・ダウンすることによってプレーヤーの地位を獲得したのである。

礼拝堂の最初の鐘の音が、'No Side'の合図であった。礼拝はまったくの自発的なものであり、プレーヤーの何名か、多分にその全員が引き裂かれたジャージと汚れたズボンをはいてそれらに激闘の痕跡を残して縦に並んで礼拝の場所についた。この自発的な礼拝は試合そのものと同じ位、Sixth Match の日の一部であった。ゲームは、Tom Brown's Schooldays の中で記述されている³⁾ ゲームと同じであったことは注目される。しかし、1860年代の Rugby School のフットボールの説明については、当時、偉大なプレーヤーであり、一般的には Pup として知られている Old Rugbeian の Charles Dakyns についての言及なしには完璧なものにならないと Bennet は述べ、次のように記述している。

この素晴らしいプレーヤーと一緒にプレーしたことのある者は皆、異議なしに、かつて、又、これ以降も ハーフ・バック として彼に匹敵するものは誰もいないと言うのだが、というのは、彼の相手をかわすことそしてキックはまったくずば抜けていたからである。彼はどちらの脚でも、フル・スピード又はハーフ・スピード、又は立ったままでさえ、そしてどんな角度からでもキックすることができた。彼は、一度タックルを受けながらボールを身体から離して持ってキックしてゴールを決めたことがある。これが上手なドロップ・キックのためのヒントである。というのは、ボールを身体から離して保持しなければ、脚を完全に振ることができないからである。彼はすみやかに周囲を見ることができないとき、踵でキックしてゴールを狙い、そしてボールを持って、確かに他の誰もやったことのないことをなした。

走者としては、多くの者が、俊足であったのは疑いが無いが、彼の判断力と判断の素早さは躓かせられたり、hack over されないようにすることを可能にした。そして私が知る限りでは、彼は決して誤りを犯さなかった。

1864年、彼は Cock Houses' Match におい



TAKES HIS INOP AT THE SCHOOL GOAL

図4 (The Badminton Magazine. FOOTBALL BY AN OLD RUGBEIANより)

てゴールを2つ決め、そして不運にも、私はその各々の時に彼が実際にドロップ・キックするのを見逃したけれど、私はゴールで終わった彼のプレーの一片を見たのだが、それは彼の力をまったく示すものである。

Dakynsがボールを持った！ Pupに警戒しろ！ が、すべての者が追撃に加わった時の叫び声であった。私が、ドロップ・キックの鋭いどさっという音を聞いたのは、しばらくしてからであった。というのは、何かを見るのは私が居たところからは不可能であったからである。フィールドを突進してきているSchoolのすべてのゴール・キーパーたちの荒々しい叫び声は、この偉大な試合においてゴールについて考えられたことを示し、そしてそのような光景は全員がプレーヤーであったところでは起こり得なかった。ゴール、ゴール！がその叫び声であった。いいドロップキックだ、Pup！そしてその興奮は何分もの間、静まらなかった。というのは、そのような走やキックは以前には決して見られなかったからである。

ゴールは変わり、Cock Houseは得点をあげるために全力を尽くしたが、Dakynsは彼等のために再び大いに貢献し、ドロップ・キックでもう1つゴールを決めた。このよう

な離れ業は、決して敗れることがなく、それがDakynsが、彼の時代、他のすべての者より優れていたまったく完全な証明であった。

彼の活動について多くのことが著述されたかもしれない。というのは、彼は胆力と判断力が要求されるすべての運動で抜群であったからである。prisoner's base（陣取り）のため、相手をおかわすのが極めて上手になりそして彼が跳び越したことの無いRugby School近くの門とか生垣はほとんどなかった。彼のgate jumpingは極めて独創的なパフォーマンスであった。というのは、彼が跳び越すのを失敗したとしても、膝の下で一番上のバーを握むことができるので転倒せずに済んだからである。⁴⁾

BennetはDakynsのなした離れ業についても1つ記述している。

Rugby School近くのButler's Leapは試みるのが極めて手際の要するジャンプであったのだが、狭い道から走り、約2フィートの高さのポストと垣を越え、そして約11フィートの落差のある20フィート幅の小川を渡るものであった。なすべき並はずれたことは全力で走って垣を跳び越すことであったが、Dakynsは、ある日、ジャンプを時間ぎりぎりまで実行しなかったもので、垣にあたり、もう

一方の側の泥の中に肩から転倒し、気絶して横たわっていた。しかし、我々は、彼が負傷せず起き上がるのを見て安心した。彼はすばやく戻り、一息ついたあと、うまくジャンプしてもう一方の側に跳び越したのである。⁵⁾

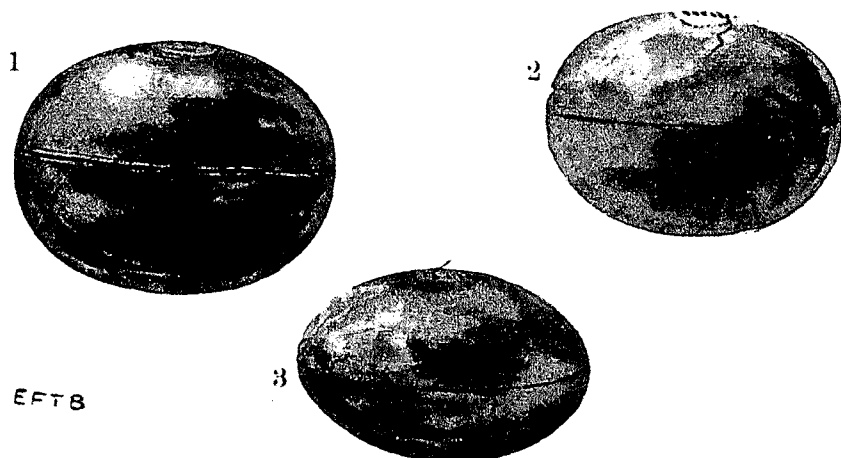
Rugby Schoolにおけるフットボールについての最初の考えは、ボールをfollowすることであり、最も優秀と看做された者は、following-up capsを与えられたのであるが、1860年代には、チームのキャプテンによってどんな足の遅いプレーヤーに対してでもFollow upが絶え間なく大声で叫ばれていた。バックスのプレーヤーは、彼等がチームに最も役に立てると考えた場所をとった。バックスとハーフ・バックスがフィールドに一緒に位置をとることがゲームにおける発展であった。Dakynsの時代、バックスとハーフはキック・オフ直前にしか位置につかず、ちょっと前の時代には、プレーする者はフィールドに集まり、2人のキャプテンがサイドを選択し、プレーしない者はゴールの中に立っていた。

Big sideのボールは通常のボールよりあらゆる意味において0.5インチ大きかった（そしてこれが極めて大きな差である。）そして、ボールの先端は充分まるく、キックで70ヤードとばすのは必ずしも不可能ではなかった。外国の

チームは1860年代にはRugby Schoolを決して訪れることはなかった。というのはこのRugby School独自のゲームはなされていなかったからである。

1850～1860年代、フットボールは雨天時のゲームとしては考えられなかった。その主たる理由は、グラウンドが非常にいたんでいること、そしてボールが濡れすぎて充分蹴ることができなかったことである。雨天が避けることができなかった場合、試合が行われたのはもちろんであるが、学校の校長は、それは例外であるべきとし、天気の良い日は、兎追い、Big Sideでのクロス・カントリー等が極めてよくなされた。

Rugby Schoolの少年はいつも走っていた。つまり、少年は限目の授業のあと、ラケット・ボールのコートを使うため、自分の名前を記入しに全力で走って行った。クリケットのネットを張るためのpitchを確保するために全力で走って行った。少年が友人と少し冒険をしたいと思った時、1マイルか2マイルは小走りに走ったが、そのようにして再び授業が始まるまで冒険をするための時間をできるだけ多く稼いだのである。少年はSchool Houseにいなかった場合、Big Schoolの祈りに間に合うように走らなければならなかった。



FOOTBALLS: 1, BIG SIDE BALL; 2, MATCH AND PUNT-ABOUT BALL;
3, MODERN, PLUM-STONE SHAPED BALL

フットボールは、事実、技術を要するたいていのゲームと同じように基本的には雨の降らない天候のゲームである。しかし、フットボールはクリケットやゴルフのように雨の日でも行うことができたがその場合、最高の技はめったになされなかった。

Bennetは、最後に次のように結んでいる。つまり、

どんなクラブ又はどんな学校にも playing が真に意味することを試みさせなさい。彼等の行為が公表されないことを第1の規則にせなさい。：それにより彼等はスポーツを愛するためのスポーツが実はどんなものであるかわかり、そして決して喜びを失うことがなく、それにより利益を得るだろう。⁶⁾

結

本研究では、E.F.T. Bennetによる「FOOTBALL BY AN OLD RUGBEIAN」に基づき、1860年代におけるRugby Schoolのフットボールの状況について考察してきた。

Rugby Schoolのフットボールは、最初の規則が1846年にBig sideのLeveeによって公にされ、その学校で特定の様式で発達し、現在の完璧なフットボールの状態に近づいていったのである。Rugby Schoolのフットボールのゲームは、Old Rugbeianたちにより、イングランドの様々な地域に植付けられ、そして伝播していった。

1860年代におけるフットボールのゲームの状況が、Tom Brown's Schooldaysにおいて記述されているゲームと同じであることは注目すべきであり、又、校庭のグラウンドのほぼ中央にある3本の木がフットボールのゲームに重要な役割を果たしたのも興味深いことである。

注及び引用・参考文献

- 1) THE LAWS OF FOOTBALL AS PLAYED AT RUGBY SCHOOL, sanctioned by a Levee of Bigside on the 7th of September, 1846.
- 2) E.F.T. Bennet FOOTBALL BY AN OLD-

RUGBEIAN, The Badminton Magazine, vol. 7 (July to Dec.), P. 278, 1898.

- 3) Thomas Hughes, Tom Brown's Schooldays, Chapter V. Rugby and Football, p.p. 91～101. printed by Garden City Press, Letchworth, Herts in Great Britain for J.M. Dent & Sons Ltd, Aldine House, Welbeck Street, London, 1949.
- 4) E.F.T. Bennet, *ibid.*, p282.
- 5) E.F.T. Bennet, *ibid.*, p.p. 282—283.
- 6) E.F.T. Bennet, *ibid.*, p286.